



ぶらはら文庫

わたし  
もう  
諦めました

The author  
**北原みのる**  
Illustration  
**とろろこもだ**

第一夜	恋の終わり	5
第二夜	少女観察	53
第三夜	汚す純情	80
第四夜	汚された身体	128
第五夜	妹の裏切り	154
第六夜	奪った希望	183
第七夜	公開情事	206
エピローグ	そして杏奈の気持ち～	231

『どこに行けばハメさせてくれるの?  
このマンコ?』

『うぶ主乙。いいエロマンコ写真ですね』

『でもハメ心地よさそうじゃね?』

『可愛い娘に見えるけど、これで精液便所?』

『ちゃんと設置場所を書けよ、  
ハメに行ってやるから』

# 【恋の終わり】

第一夜

「ん……あ、ん……んつ、はあ、ああ……あん」

モニターを見入る少年は、少女の秘めやかな指使いを見つめてはいなかつた。

「——はあ、んん……気持ち……いい……」  
大きく開いた脚の真ん中に、指を這わせててもぞもぞと自慰に耽る少女の動画が、液晶の上に映し出されている。

彼くらいの年であれば、ズボンを脱ぎだし興奮に身を任せて自慰に走りそうなものだが

……。  
身動きを忘れたように、彼は椅子の上に硬直して動画を見つめていた。

「……ウソだろ、コレ」

彼——原当麻は、動画の主の顔を、液晶が焦げそうなほどに直視していた。オナニー動画に興奮しない訳ではない。だが、画面の中の彼女の顔に見覚えがあればこそ——興奮は異様な動搖を帯びる。



こぶち あんな  
古淵 杏奈

こぶち ちさき  
古淵 智紗

その清純なイメージで学内でも人気の美少女。叔父の元で妹の智紗と暮らしている。誰にも言えない淫らな秘密を当麻に知られ、より悲惨な状況へと追い込まれてしまった。

当麻の中での葛藤とせめぎあいが、彼にこう思わせていた。

かしくない。

彼の知つてゐる古淵杏奈こぶちあんなと違う部分を、必死になつて探し出そようと目が血走り、動く。

あの、古淵杏奈が誰かに撮影されながら、オナニーするなんてありえない。

……これは、杏奈ではない他の誰かが出演しているA.V.か、何かだ。

「…………んん、んう…………も、もつと続けなきや……ダメ？」

ふと、モニターの中の少女が問いかける。

「そうだ、イクまで続けるんだ。おじさんがしつかり撮つてるからね？」

それに返答したのは、恐らく動画を撮影しているのであろう、男の声。

「オマンコをべっぴょにして、感じているところを見せてくれよ、杏奈……べふふふ」



「う……うん、わかった……はあ、あ、あああ……」

そんな画面の中の会話に、当麻は愕然となる。

「杏奈って言つたよな……今。つてことは……これは、杏奈に違ひないのか……畜生！」

「ん……ちよつと気持ちよくなつてき……た、ん……は、あん！ ん、んふあ……はあん！」

杏奈と呼ばれた少女が甘い声を上げる。

その時当麻の胸を駆け抜けたのは、彼なりの純情が傷ついた痛みと、汚された心臓を刺すような苦しさだった。古淵杏奈が、憧れていた同じ学園の美少女が、こんなことをさせられている動画なんか見たくなかった。

あのとき、駅前でこんなものを拾わなければ——こんな思いをしなくて済んだのに、と。

\*

「おう……なんだ、お前ら馬鹿正直に学校きてんのかよ。まだ寝てるのかと思つたぞ」「——いつもの二人と会い、開口一番についつい出してしまうのは、いつもの憎まれ口。」

「さぼつても良かつたんだけどさ、まあ……日数足りなくなつてダブるのはやだからね」

そんな風に返してくるのは入谷勝治。

「当麻の秀才ヤンキーってのも反則だろ。いーねー頭の良いヤツは、苦労しなさそうで」

「当麻の秀才ヤンキーってのも反則だろ。いーねー頭の良いヤツは、苦労しなさそうで」

番田徹もまた、溜め息混じりに返してきた。  
そんな二人へと、当麻は続ける。

「頭が悪いってのも羨ましいぞ、俺からしてみると。悩み事少なそうで、世の中幸せ一杯

つて感じでな」

「当麻、すこし点数分けてくれよ。そうすりや明日明後日さぼつたつて問題ないしさー」

勝治の口ぶりに、当麻も苦笑する。

——当麻をリーダー格にしたこの三人は、学園の中でも名の知られた存在であつた。知恵も回るし腕も立つ、学園の教師ですら直接叱責するのを避ける三人組である。不良——といえなくもないが、ことさらにワルぶつて恐怖と威圧を振りまき、周囲に鼻を摘まれる存在ではない。ただ、この学園の中で彼らの意思に逆らうこととは不可能に近い——そういう力を帶びていたのであつた。

廊下で悪友たちと雑談に耽つていた当麻の横を、薰風が吹き抜けるように何かが通り過ぎていった。

「おはよう、杏奈。今日もずいぶん可愛いね」

それを見逃さずに、当麻は声を掛ける。

可憐で繊細な印象の強い、制服姿の少女は、びくつと脚を竦めて伏し目がちに応えた。

「……お、おはよう、原くん」

肩幅が細く首筋がすらりとしているが、制服の中の身体は年相応の発達を見せ、バランスがいい。容姿と容貌を合わせれば、野に咲く花のような秀麗な美少女といえる彼女の唇が震える。

「ありやあ、古淵？俺と徹にはご挨拶してくれないので？」

杏奈へと言い寄ろうとする勝治を押さえ、当

麻は彼女へと話しかけた。

「頭悪いのが怖がらせてごめんね、杏奈？」そ

ういえば、この前の話だけど――」

「頭悪くてわるうござんしたね。でも頭が良いお前だつて杏奈を相当ビビらせてるじゃないかよ？」

が、そんなやり取りをぶつた切るように、杏

奈は頭を下げた。

徹が混ぜつ返す。

「ごめんなさい、その――町田くんが待つてゐるから。あの話はその……私には無理だから、さようなら、またあとで……！」

鞄を抱えて走り出す杏奈を、当麻は残念そうに見送る。

廊下を曲がつて階段に消えるまで、その背中を見守つてゐる彼であつたが――。

「あらら、町田……つて、サッカー部の町田翔かよ。あれには呼び出されて行くけど、俺たちは無視つてか」

徹が溜め息をつく。

「ああ畜生、ヤツに先を越されたか？　ついこの前まで彼氏なしだつて聞いたから、いろいろ粉掛けたのにさ」

そんな当麻を、勝治がからかつた。

「やーい、振られたな当麻。彼女を誘つてどつか連れ込んで、ヤつちまおうとか思つてたのか？」

「結果的にはそうなつても、その前の恋愛っぽいプロセスが大事だろ？　純愛可憐な彼女はそこが美味しいタイプだ。ま、ああいうのを彼女に欲しいって、ちょっとと思つたんだがなー」

廊下の向こうに消えた杏奈を何時までも眺め、腕組みして溜息を吐く当麻を前に、二人は顔を見合わせる。



「女なんかつづこめてなんぼなのに、頭の良いヤツの考えることはわからんもんですね」「まったく同感。でも彼女は着痩せするタイプだから、脱がせてみたら抱き心地も悪くないさそうだけど……」

そんな悪友たちの頭に、当麻は思わず鉄拳を見舞う。

「つて、殴るなよ当麻！　お前の彼女でもないのに中坊みたいに腹立てるなって！」

「ま、いいんじゃね？　そのうち当麻も目が覚めるさ。そんときは遊ぶ女でも揃えてパーティでもすつかねえ」

と、そんな二人の言葉を搔き消すように、予鈴が鳴った。

「好き勝手いやがつて……さ、散つた散つた。このままここでくつちやべつても埒が開かないからな」

当麻が手を振つて追い払う仕草をすると、二人はのたのたと別方向にあるクラスへと向かつていった。

「当麻も鞄を抱えて、自分の教室へと歩いていこうとした、その時――」

「……朝練お疲れ様、町田くん？」

彼の視界の片隅に、憧れの少女が穏やかに笑う姿が見えた。

「――大変そうだよね？　私、サッカー部のマネージャーになれば良かつたな、つてちよつと思つてゐるの」

少女が楽しげに話しかけるその相手は当麻ではない。

「え？　でも……忙しいのは慣れてるけど、ほかの娘たちもいるから……邪魔になるよね」

町田翔という背の高い同級生であり――彫りの深い貌の、筋肉質の少年であった。

「あ、そうそう今週末試合なんだよね？　応援……行つてもいいかな？　シユート決めたら……あの、ね」

あれが、杏奈の彼氏か。

「……キス、してあげる……なんてね？　ほ、本気にしちゃ……つても、いいかも……」

自分はあれに敵わないのか……そんな苦く消えない思いが、当麻の胸の中にこびりつく。

「……放課後、あいつらと飲むかな。失恋の酒はうまくないんだがなあ」

そんなことを呟きながら名残を振り切るように、当麻は前を向き歩き始めた――。

\*

かちゃん。

駅前の雑踏の中、アスファルトの上に何かが落ちる音が聞こえた。  
「ちょっと？　いま落としましたよこれ、そこの人――！」  
思わず拾つて、声をかける当麻。

が、持ち主とおぼしき中年男は、彼の声が聞こえないのかすたすたと、雑踏の中へとその姿を消していった。

「なに拾つたんだ、当麻？」

徹が傍らからのぞき込んでくる。

「ん……USBメモリ……だな。交番に出しとくか？ めんどくさいんだよなあ」

当麻は指ほどの長さのプラスチックの筒を眺めて言う。

「だいめだろ、俺たち酔っぱらってるから、ケーサツ行くのは自殺行為だつてば、あはは」勝治が笑う。

「そーそー、どーせ大したもんじやないからもらつとけつて。じゃ、次カラオケだ！」徹もそれに唱和する。そして当麻も、大したものではないと思っていた。

だが、彼の手の中に舞い込んだ小さなシリコンとプラスチックの欠片は、彼を取り巻くすべてを変える魔法の宝石のような力を帶びていたのだ。当麻が何気なくのぞいたUSBメモリの中には——。

\*

「んんあ……：いつちやう、いつちやうよお……：はあん、んふ……：はあ、あふ、ああんつ！」

膝頭を引き付けるように震わせ、指を秘部に擦りつけ、杏奈がオルガズムに達する。「はあ……ああん、んう！ はああんつ！」

恋心を抱いていた少女の全裸、それもオナニーの光景を見せつけられる当麻は、望外の喜びよりも怒りと喪失感に苛まれていた。

だが、熱くなる胸と裏腹に彼の怜俐な頭脳は、異様なほどの回転を見せ始めていく。「んふあ……もうこれで許して、おじさん……はあ……」

「いい絵が取れたよ。可愛いねえ杏奈……ふふふふ。これからも、ずっと綺麗な姿を見せておくれよ？」

杏奈の声に応え、画面の外から聞こえてくる、下卑た声。

「……おじさんってことは……たしか、杏奈は妹と一緒に親戚の家にいるつて、そんな話があつたよな」

当麻はつい独りごちた。

——つことは、これは……その叔父が姪の杏奈に性的な悪戯をしてる証拠で、落としたのはその叔父か？ そう思い至る。

——こんな動画を撮つてなにをやろうとしてたんだか……小遣い稼ぎかな？ どちらにしても——。

ぶちばら文庫

# 私、もう諦めました

2011年 9月30日 初版第1刷 発行

- 著 者 北原みのる
- イラスト とろろ・こもだ (表紙)
- 原 作 クレージュ  
【Night where elegy flows... より】

発行人：久保田裕  
発行元：株式会社パラダイム  
〒166-0011  
東京都杉並区梅里2-40-19  
ワールドビル202  
TEL 03-5306-6921

印 刷 所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、  
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示しております。

©MINORU KITAHARA ©そふとさ～くるクレージュ

Printed in Japan 2011

PP025

□ ぶちばら文庫  
creative

# それでも 水着は 脱がさない！

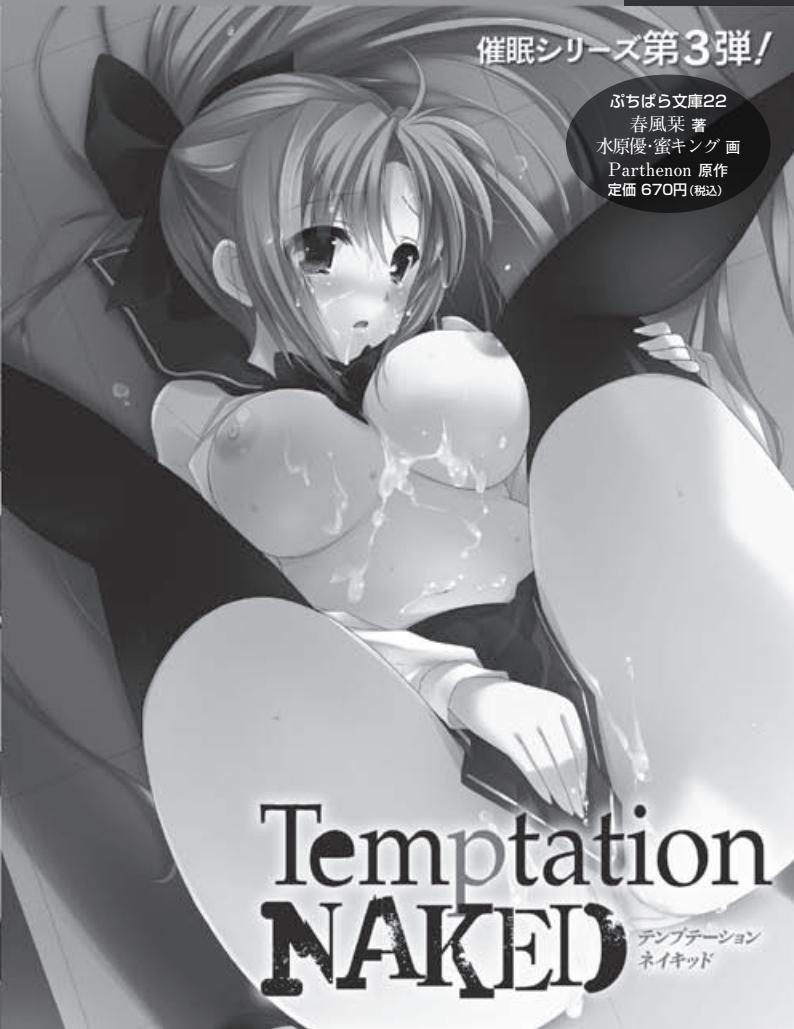
Soredemo  
Mizugi  
Ha  
Nugasanai!

好評発売中

偶然当たった沖縄旅行。憧れの水無瀬まどかとつきあい始め、幸せ絶頂だった康祐は、迷わず決意を固めた。この旅行中に、まどかと初エッチをするのだ。だが、行きの機内で出会った陽子に初体験を手伝ってもらったことで、ふたりの旅行は誘惑の連続になってしまった。意外と巨乳だったまどかの水着姿に感動しつつ、大人な陽子にも惹かれる康祐は、水着エッチの毎日に！

ぶちばら文庫23  
玉城琴也 著  
珈琲貴族 画  
定価 670円(税込)

真夏の天使たちよ…  
**脱いじやダメ！**  
**絶対！**



好評発売中

ずっと性愛で  
欲しかった!  
幼なじみの  
お口は恋人。

ぶちばら文庫24  
夜空野ねこ 著  
にの子 画  
Parthenon 原作  
定価 670円(税込)



ふ  
ぶ  
え  
ち  
ら  
! Fella-Fetish



# 【paradigm】 ぶちばら文庫は ライター&イラストレーターを募集中です!

「ぶちばら文庫」シリーズを盛り上げる、新たな作家を募集いたします。「ぶちばら文庫」は、ゲームノベライズだけでなく、オリジナル創作による美少女小説も刊行予定です。応募規定は、それぞれ以下のようになります。

皆様のご応募をお待ちしております！

## 1. 募集内容

「ぶちばら文庫」シリーズでは、美少女ゲームやライトノベルを好む読者層へ向けた作品作りを目指しています。ご応募いただく場合も、ヒロインの個性や魅力が伝わるようなもの、シチュエーションへのこだわりを感じられるものなど、はっきりしたテーマのある作品をお願いいたします。題材はとくに限定していません。発表済か、未発表作品かも問いません。

## 2. 送付方法

小説の場合は、テキストデータをメールでご応募ください。コミックやイラストは、原稿用紙をお送りいただきても、データをお送りいただいても結構です。データが5MB以上の場合は、ファイル転送サービスなどをご利用ください。コミックには枚数の規定はありません。小説は1ページを17行×40文字として、50ページ以上の作品をお送りください。

## 3. 選考結果などについて

メールでご応募いただいた場合は、着信のご連絡は必ず行っています。選考は隨時行っており、締め切りはとくにございません。選考終了後、採用の方にのみ別途お返事をしております。通常はお返事までに、2週間～1か月ほどお時間がかかります。

## 4. 作品の送付先

ご郵送の場合は下記住所までお送りください。メールでのご応募は以下のアドレスで受け付けております。どちらの場合も必ず「お名前、年齢、ご職業、ご住所、電話番号」を書いた紙を同封するか、明記してください。  
メールの宛先: [desk@parabook.co.jp](mailto:desk@parabook.co.jp)

〒166-0011 東京都杉並区梅里2-40-19 ワールドビル202  
株式会社パラダイム 「ぶちばら文庫作品応募」係

※ご応募の際の個人情報は、選考結果のご連絡にのみ使用いたします。

作品のご返却を希望の場合は、宛名を書いた返信用封筒と切手を同封してください。